

「末松謙澄の書について」

末松謙澄の芸術面での活躍に光を当てて見よう。なかでも書の面に関して述べて見たい。

明治期は現代とは違い、文章を書くには筆と墨しかなく、いやが応でも筆文字である。

私も書の道を歩んでいる関係上筆文字に関心が強い。したがって折にふれ郷土に関する人物の書が目に入ればできるだけ手に入れようと努力している。

なかでも謙澄の書は特に魅力的である。謙澄の書を鑑賞すると、まず筆が躍動している。その動きに迷いが無い。少々失敗してもそれを失敗と見せない。臨機応変に対処している。その対処の仕方が面白い。

その一つを紹介しよう。多忙な政治活動の合い間を縫って、心の洗濯のため、高野山に詣でた時に書かれた作品がある。大きな画仙紙に自作の七言絶句が認められている。気宇壮大な傑作である。「名山信宿鍊心成 追憶先賢恥不才 高矣金剛峯上月 一輪清影照靈台 宿高野山寺玄浄師呈詩見似乃次其韻 青萍迂謙」これには、最後に落款印を押している。その印はお碗のような丸い円の中ほどに小さな「末松」のハンコが押されている。旅先なのでおそらく大幅に見合う印の持ち合わせがなかったのであろう。そこにあったお碗に印泥をつけて押し、その中心に小さなハンコを押して、あたかも大きな雅印に見せかけていた。

このようなことは多々あったであろう。これは謙澄の人間の大きさを表わす一例であると思う。

また、信州諏訪湖のほとりのホテルの落成式に出席した時に認めた和歌の軸がある。「歳はこび人や心をのこすらん あかぬながめの諏訪の水海 謙澄」諏訪湖の素晴らしい景色は人の心にいつまでも残るであろうと読んだものである。伸びやかで明るい筆運びは見るものを飽かせない。



vol.7

文化人末松謙澄

上質の絹に書かれており、書き味も良かったであろう。気持ち良く書き進んで行き、最後の「諏訪」を「訪諏」と書いてしまった。書き終えて間違いに気づき、書き直すこともせず返り点を打って急場をしのいだものと思われる。これも彼ならではのご愛敬であろう。

このように謙澄は少々ミスはものともせず、人並はずれた学識と教養で世界を席卷していったことであろう。

「書は人なり」の言葉が謙澄には相応しい。

(文化人末松謙澄を考える会

棚田看山)

▶ 謙澄の漢詩

「名山信宿鍊心成…」

と即席の雅印

